

# 金子みすゞと仏教の自然観

本 多 至 成

(相 愛 学 園)

## 一

自然法爾の思想は親鸞が体得し、到達した最も円熟した境地であるとされる。親鸞の晩年の書簡に示される自然法爾とは、どのような境地であろうか。佐藤正英氏は講座『日本思想』一の「自然」の項で諸説を整理された。<sup>(1)</sup>その後、梯実円、安藤光慈、常磐井慈裕など各氏により自然法爾の理解が深められている。今、私は「自然法爾とは愚者となつて往生することをめざすところの「平常底」である」との立場に立つて本論を進めたく思う。

「金子みすゞ」のブームである。このみすゞブームは、詩人の矢崎節夫氏が岩波の『日本童謡集』により、金子みすゞを知り、彼女をよみがえらせた十六年前から続いて、今日に至っている。<sup>(2)</sup>一九九二年二月に下関をスタートし、全国各地を巡回して毎年開かれている「金子みすゞ展」が、ブームに火を点けた。今年もこの展覧会は神奈川、熊本、香川、宮崎、長野で開かれて、巷間では「みすゞ晴れ」「みすゞ天気」「みすゞ元気」などの流行の言葉を生む一方で、小学校の教科書にも金子みすゞの詩が取り上げられている。大学入試の問題にも多く出題され、一九八五年東京大学の入試では、みすゞの作品である「お魚」と「打出の小槌」を示して、「次の作品は同じ作者の作品である。二つの

作品に共通している作者の見方、考え方を一六〇字以上二〇〇字以内で記せ」という内容で出題されている。そのうち「お魚」は「打出の小槌」とともに雑誌『童話』に掲載されたみすゞの処女作品である。

海の魚はかはいさう。／お米は人につくられる、牛は牧場で飼はれてる、鯉もお池で麩を貰ふ。／けれども海のお魚は なんにも世話にならないし いたづら一つしないのに かうして私に食べられる。／ほんとに魚はかはいさう。//（一一五）

大正十二年九月のこの作品を、西条八十はこの作品のふっくりした暖かみを、英国の女流詩人であるクリスティナ・ロゼッティのようだ<sup>(3)</sup>と評している。

みすゞの詩は日本から世界へと拡大しつつある。ネパールには、日本ネパール協会の荻原代表らの協力のもとに二つの「みすゞ小学校」が開校された。またみすゞ基金により、ネパール僻地の人々の目の治療もおこなわれている。一方、みすゞの詩集を通じて流れている「思いやりの心」「いたわりの心」をみすゞのふるさと長門市から全国へ発信しようという運動も起っている。「みすゞの学校と全国授業イン長門」では、市内の八ヶ所の学校を会場にして、学校経営、理科、国語、道徳の授業の中に、いかにしてみすゞの心を生かすことが出来るか公開授業の形でおこなっている。これらの授業でも、みすゞの詩と自然の係りと考察は不可避なものである。<sup>(4)</sup>

アビダルマにおいて自然とは何か、原始仏教では自然をどのように考えたのか、密教では自然はどのように生かされているか、初期大乘経典では等々の視点が必要であるように、みすゞにとって自然とは一体何であったのだろうか。それらを辿って行くとき、私は、みすゞの詩にこめられている自然は親鸞の本願力自然、自然法爾の思想に行きつくのではないかと考えている。みすゞの詩には、われわれ日本人が失ったものへの回帰がある。人間中心ではない万物

同根の視点が彼女の自然観をささえているし、宗教的とも言ってよい程に、われわれ一人一人が無我化されて行く過程が示されている。

大学生に授業で「金子みすゞの詩」を紹介することがある。するとレポートにみすゞの詩を聞いた感動を添え書きして提出してくる学生が何名かは必ずいる。学生たちは、人間がはじめた自然の破壊が、人間をはじめとする生類すべての破壊に繋がって行く事実を、みすゞの詩を通して確認し、その罪性の一端を自分自身に向けようとしているのではないかと思う。

今世紀、人類は科学的研究と経済的発展により、大いなる進歩を遂げた。しかしながら、その発展の後にのこされたものは、森林の破壊、エネルギー資源の枯渇、大気汚染とオゾン層破壊等々であった。そして、森林の伐採は動植物などの自然の生態系を一変させた。酸性雨によって絶滅の危機をむかえた動植物。自然環境の破壊はいまや人間をして飢餓的情况に追い遣っている。原子力や核の使用の問題も、地球存亡にかかわる危機的状況を醸成している。このような末法的世界にあって、金子みすゞの円融無碍とでも表現される自然観を考察してみたい。

平成一五年にはみすゞ生誕一〇〇年を迎える。それを機に、従来から続いた遍照寺の墓前祭は「みすゞ忌」として三月一〇日行われ、新たな行事として四月一日のみすゞの誕生を記念した生誕祭が、全国的な集いとして計画されている<sup>(5)</sup>という。みすゞ生誕の地、仙崎は遍照寺など六ヶ寺、それに二つの神社のある宗教的集落である、みすゞはふるさとの自然と村民の素朴な所であたたかい心情の中で詩をつくり、法爾の世界を自己のいのちとしていった。みすゞの誕生は明治三六年（一九〇三）のことである。仙崎通村大字瀬戸崎浦で生れたが、仙崎は昔から捕鯨のさかな漁村であった。「鯨法會」では、

鯨法會は春のくれ、海に飛魚採れるころ。／濱のお寺で鳴る鐘が、ゆれて水面をわたるとき、／村の漁夫が羽織着て、濱のお寺へいそぐとき、／沖で鯨の子がひとり、その鳴る鐘をききながら、／死んだ父さま、母さまを、こひし、こひしと泣いています。／海のおもてを、鐘の音は、海のどこまで、ひびくやら。／（三一―二二）

とうたう。元禄五年に捕った鯨から胎児が出てきた。村人は悲しさのあまり、胎児に菰を巻き墓を作った。高さ二メートルの墓には鯨の成仏が願われている。明治元年まで七十余頭の胎児に戒名をつけ、過去帳を残し、明治元年に捕鯨を中止してからも、鯨法會は今日も続いている。

これまで、金子みすゞの作品を学術的研究対象として取り上げたものは僅少である。近時、日本大学芸術学部文芸学科の江古田文学会が編集する『江古田文学』第四三号が「金子みすゞと女性たち」という特集を組んでいる。「女性たちによるみすゞ論」「金子みすゞアンケート」「男性たちによるみすゞ論」「みすゞの唄」「続・金子みすゞ座談会」などを内容とし、総頁数四八〇頁の特集となっている。平成一一年の春に『江古田文学』第三九号にも「総力特集・金子みすゞ没後七十年」が出版されている。みすゞの作家、作品、思想などについて論じているのは、向井尚子「金子みすゞの宇宙観」（『梅花日文論叢』一九九七・三）、渡辺由紀子「童謡詩人 金子みすゞの病跡―とくに風土、死生観の観点から―」（『日本病跡学雑誌』一九九七・一二、日本病跡学会）、野浪正隆「金子みすゞ詩作品の表現特性」（『学大国文』一九九八・二大阪教育大学）、藤本哲城「金子みすゞを読む―小学生の授業にどう生かすか」（『児童心理』一九九九・九）、詩と詩論研究会編『金子みすゞ この愛に生きる』（二〇〇三・七、勉誠出版）などがある。みすゞの詩を宗教的な立場から研究したものとしては、酒井大岳『金子みすゞの詩を生きる』（一九九四・八JULA出版刊）がある。これは酒井氏の禅僧としての日常より、みすゞの詩の心を解説したものである。藤本恵には「花の目―金子

みずど考―(『国文』一九九五・七お茶の水女子大学国語文学会)があり、氏はみずどの作品を評して「仏性の輝きを神と表現し、神と捕えている」と論じている。島田陽子著『金子みずどへの旅』(一九九五・六編集工房ノア)にあつては、みずどの詩は「負の思想」と表現され、「死を淨福とし、なつかしく慕わしいもの」の見方がみずどにあるという。「生き急いだひとの死の肯定、死への傾斜」が考えられるという。たしかにみずどの詩の中に「お坊さま」「巡禮」「報恩講」「お仏壇」「仏さまの国」「鯨法会」「燈籠ながし」などのように法事に関係するテーマの他に、「とむらい」をテーマに四篇、「墓」をテーマにしたもの五篇がある。「お葬ひごっこ」では、

お葬ひごっこ、お葬ひごっこ、お葬ひごっこ、堅ちゃん、あんたはお旗持ち、まあちゃん、あんたはお坊さま、あたしはきれいな花もつて、ほら、チンチンの、なあも、なあも、／＼してみんなで叱られた、ずあぶん、ずあぶん、叱られた。／＼お葬ひごっこ、お葬ひごっこ、それでしまひになっちゃった。// (一一一四五)<sup>(6)</sup>

とうたう。みずどの詩を死への傾斜と見る見方に高遠信次氏はみずどの詩を純粹詩として見る見方を示している。そしてみずどを「童心詩人」と呼ぶ。この視点に立つとき、みずどの詩は正とか負、死とか生ではなく彼女の生まれ育った自然と生活環境、とくに環境に息吹く仏教的風土、真宗的土徳の問題が大きく影響していると思われる。高遠氏のいうみずどの詩は童謡詩ではなく純粹詩であつて、さらに私はこれを宗教詩と位置づけることも可能ではないかと考えている。詩と詩論研究会編『金子みずど永遠の母性』(二〇〇三・八勉誠出版)のなかで、石黒吉次郎氏は「みずどと仏教」において「みずどは仏教の信仰心厚い家庭のなかで、素直に仏教を受け入れているように見える。」と語っている。<sup>(7)</sup>

## 二

私のみすゞの作品と出会ったのは一九九七年のことである。詩の根底に何か不思議な程の清楚な流れが認められた。それは一人の天才的詩人のものというよりも、宗教心に根付いたものである。しかも、そこには仏教という「機」の深信」の徹底がある。もし「機の深信」を認めるならば、当然「法の深信」の縁のみすゞ自身が得ていることになる。

藤本氏の神の表現、島田氏のいう死への傾斜、負の思想、さらには高遠氏が自著でいっている「彼女は自分を罪業深いと考えていたのではなからうか」という疑念を私は持っている。だから神へ懺悔したかったのではなからうか、それがキリスト教へひかれて行く要因になったのではなからうか。」<sup>(8)</sup>といった仮説はすべて逆転されてしまうことになる。みすゞの詩の背後にある仏教的表現と仏教理解の深さは比例しているのである。みすゞには親鸞が到りついた自然法爾の世界が領解されている。

みすゞが生まれた仙崎は、仙崎湾と深川湾とに囲まれた細長い三角州の町で、南北は約一キロあまりあり、その中に寺院は六ヶ寺、神社は二社もある。仙崎の北端から海をへだてて対岸は青海島があり、この島には鯨墓や鯨の過去帳が残されている向岸寺、清月庵などがある。讃誉上人が開いた西円寺も仙崎の向いにある。風土や環境は人間の人格形成に大きな影響を及ぼす。みすゞの中に海や魚が多くうたわれるように、お坊さまやお墓、お寺、仏さまなどの作品があるのも、仙崎という宗教村落とでもいう環境に起因していると考えてよい。仙崎を中心とする一带は浄土宗の強い地域だといわれる。先述の讃誉上人に係る向岸寺、清月庵、西円寺なども浄土宗であった。それで書物によっては、みすゞについて「熱心な浄土宗信者」とするものもある。<sup>(9)</sup>しかし、みすゞの詩「報恩講」からも知られるよう

に、彼女の金子家は浄土真宗の熱心な門信徒であった。菩提寺は仙崎の浄土真宗本願寺派の遍照寺である。遍照寺境内の金子家の墓地にみすゞは眠っている。みすゞの忌日である三月一〇日（昭和五年）には遍照寺で墓前祭が毎年つとめられた。（平成一五年のみすゞ生誕一〇〇年からは全国的に四月一日を「生誕祭」として行事が開催せられ、墓前祭は「みすゞ忌」となるという）

このたび仙崎を踏査し、遍照寺におけるみすゞの幼年期のころを聞き歩く中、みすゞがいつも祖母であるウメ（昭和二年八月二二日寂）に連れられて、お寺へお参りしていたということを聞いた。これを契機として金子家と仏教との係りを考えてみた。みすゞの母であったミチも熱心な仏教徒で、みすゞが遺した一人娘ふさえをしょっちゅうお寺へ連れていっていたという。<sup>(10)</sup> みすゞの父、庄之助はみすゞが二歳であった明治三九年二月一〇日に清国宮口永世街で暴漢によって殺された。享年三一歳であった。信仰心のあつい祖母ウメと母ミチは四歳の兄の堅助とみすゞ、そして満一歳になった弟の正祐の三人の子供を毎日仏間に誘い、なぐさめて、その日のできごとを父、庄之助の仏前に報告して励ましたという。<sup>(11)</sup> また私の聞きとりでは、堅助とみすゞは、よく渡し場から小舟に乗って青海島に渡り、大日比にいる父方の親戚の前田家に遊びに行った。前田家は庄之助の姉ミヨが嫁いだ先だとされるが青海島では前田家から、世界最古の日曜学校ともいわれている西円寺の日曜学校にも出席していたという。矢崎節夫氏はみすゞの家庭の宗教的な雰囲気について、つぎのように描写している。

ここで祖母ウメと母ミチが寝起きし、家族四人の楽しい食事が行なわれた。また、この部屋には仏壇があった。仏壇には毎朝ご飯が供えられ、朝と晩には必ずお灯明があがった。祖母ウメや母ミチが祈りに触れ手を合せる姿を見て、幼い頃からテルも堅助もよく手を合せた。テルにとって仏壇は亡くなった父庄之助に会える場所であり

と。<sup>(12)</sup> みすゞの作品に影の如く寄り添う祖母と母との影響、そして仏教的深まりが、「星とたんぼぼ」となる。

青いお空の底ふかく、海の小石のそのやうに、夜がくるまで沈んでる、晝のお星は眼にみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。／散ってすがれたたんぼぼの、瓦のすきに、だアまって、春のくるまでかくれてる、つよいその根は眼にみえぬ。見えぬけれどももあるんだよ。見えぬものでもあるんだよ。//（二一

一〇八）

みすゞを中心とする金子家の生活と一枚となった仏教の求道は、家庭を解放して念仏を学ぶという形態をとった。それがみすゞの実家で行われた金子文栄堂二階での「歎異抄の会」の開催である。当時の、みすゞが通った瀬戸崎尋常小学校の四年生で、みすゞの担当となった大島ヒデ先生の回想談には次のようにいう。

それから、私が女学校を卒業してから四、五年の間、たぶん明治四十三年から大正三年くらいまでの間、金子さんの家の二階の部屋を借りて、三隅の西福寺の和道實先生を中心に、宮川義熙（当時郵便局長代理）、和田義忠（当時仙崎小学校教員）、中谷次郎（後仙崎小学校二十七代校長）、横山繁雄（後十一代仙崎町長、公選による初代仙崎町長）と私の六人で、親鸞の『歎異抄』を読んだり、法話を聞いたりしておりました。金子さんのおばあさんやお母さんも、一緒に聞いておりました。そんな時、小学生のテルさんもお茶を運んできてくれたりして、よく一緒に聞いておりました。<sup>(13)</sup>

という。自然な形でみすゞの口から宗教詩が迸り出る条件は幼児期にも準備されていた。やがて金子文英堂書店、上文英堂書店での就業は、読書好きのみすゞの内に秘むられた詩人としての能力を十二分に発揮させていった。浄土

真宗の開祖、親鸞の命日の法要である「報恩講」をみずぶは次のように唄う。

「お番」の晩は雪のころ、雪はなくても暗のころ。／くらい夜みちをお寺へつけば、とても大きな蠟燭と、とても大きなお火鉢で、明るい、明るい、あたたかい。／大人はしつとりお話で、子供は騒いちゃ叱られる。／だけど、明るくにぎやかで、友だちやみんなよってゐて、なにかしないぢゃゐられない。／更けてお家へかへっても、なにかうれしい、ねられない。／「お番」の晩は夜なかでも、からころ足駄の音がする。／（二一一―八一）

### 三

親鸞が開顕した浄土真宗の救済は浄土三部経をその据りとしている。そして阿彌陀如来の本願力廻向による救済を説くものである。自力のはからいを戒めて本願他力の廻向に全托することを教えている。ところが浄土三部経には他力に相当する言語（paratantra）は見出せない。自然という語は『仏説阿彌陀経』に一回、『仏説無量寿経』に五二回、『仏説観無量寿経』に六回出てくる。これらを自然ということばの意味の上で区別すると、願力自然、無為自然、業道自然となる。親鸞の場合は本願力自然を自然法爾と受けとり、あるがままの自己という深遠な宗教的境地に到達したものである。『仏説大無量寿経』で言えば悪趣自然閉であり、自然化生であり、自然得聞、他力妙声となる。『仏説観無量寿経』で言えば自然而有であり、自然当現であり、自然化成なのである。『仏説阿彌陀経』にあつては自然生念仏となる。みずぶは「木」の中で、

お花が散って 實が熟れて、／その實が落ちて 葉が落ちて、／それから芽が出て 花が咲く。／さうして何べんまはったら、この木は御用が すむか知ら。／（二一九〇）

という。木への深い思いが、そのまま私の輪廻転生の姿（実相）なのである。やがて自然法爾によって化成するのである。自己を「悲しき存在」と歎き、愛欲に沈み、善を求めながらも悪をなさずにはおれない自分を凝視した一人の人間。文字通り罪悪生死の親鸞が、絶対他力の彌陀の大慈悲に浴して、至りついたところ、それが自然法爾なのである。「佛さまのお國」の中のみすゞはいう。

おなじところへゆくのなら、み佛さまはたれよりか、わたくしたちがお好きなの。／あんないい子の花たちや、みんなにいい唄きかせて、鐵砲で射たれる鳥たちと、おなじところへゆくのなら。／ちがふところへゆくのなら、わたくしたちの行くところは、一ばんひくいとこなよ。／一ばんひくいとこだって、私たちには行けないの。それは支那より遠いから、それは、星より高いから。／（二一―二七三）

と。善を求めながらも悪をなさずにはおれない悪人凡夫こそ、阿彌陀如来の大悲の正機（めあて）であれば、この凡夫こそ浄土往生できる当人で、ストレートに極楽国に往生が可能である。ところが、善人は自分の善行に溺れ、疑情をもってしまふので、ストレートに極楽国へは行けず、化土である天上界の胎宮に五〇〇年間とじこめられる。みすゞは第一八願の本願は罪悪の私業が迎えられるところで、「おなじところ」と表現し、第一九願（諸善万行）及び第二〇願（自力称名念仏）を自力作善のゆえに「ちがふところ」と示すことによつて、真実の浄土と胎宮の往生を区分したと思われる。

ところで、仏法は自己自身にとどけられた信心の開発をめざす道である。そこを親鸞は「親鸞一人がため」といい、蓮如は「往生は一人のしのぎ」と表現した。<sup>(15)</sup> 宗教は絶対者と私との対話である。みすゞは「私の髪の毛」でいう。

私の髪の毛の光るのは、いつも母さま、撫でるから。／私のお鼻の低いのは、いつも私が鳴らすから。／私のエプロン

<sup>(14)</sup>

の白いのは、いつも母さま、洗ふから。／私のお色の黒いのは、私が煎豆たべるから。／（三一九四）  
と。母さんと私は如来と私で、機（私）の深信と法（如来）の深信で一つ、即ち機法一体ということとなる、次の「露」では、

誰にもいはずにおきませう。／朝のお庭のすみっこで、花がほろりと泣いたこと。／もしも噂がひろがって 蜂のお耳へはいったら、／わるいことでもしたやうに、蜜をかへしに行くでせう。／（二一九九）

と唄う。花（如来）を泣かせるものを蜂（私）と見る、それは自内証の世界である。「積った雪」では、

上の雪 さむかるな。つめたい月がさしてゐて。／下の雪 重かるな。何百人ものせてゐて。／中の雪 さみしかろな。空も地面もみえないで。／（二二四二）

という。私（雪）の無明性は私をどこに置いてみても、迷いの世界から解放されることはないのである。この得体の知れない無明煩惱的自己こそ宗教のめざすところである。

親鸞の説く本願力による絶対他力の救済論は、他力廻向・往生浄土・悪人正機の三をその教義の根幹とする。他力廻向はさらに往還廻向、行信廻向、因果廻向に分別されて普遍性と主体性、そして完全性を示す。私はみずぶの生涯の詩五一二篇を整理して五項に分類してみた。一、真理の在処。二、一人のしのぎ。三、罪の自覚。四、縁起・空（無自性）。五、浄土（超越）である。親鸞では自然法爾、愚禿の自覚、罪惡の救済、往還廻向、往生浄土とも言いうる内容である。

みずぶの作品の中で真理の在処を詠んだ作品は多い。一一一一、一一二六、一一三五、二一一〇八、二一一六三、二一一八三、三一五、三一五五等。「海とかもめ」には、

海は青いとおもつた、かもめは白いと思つた。／だのに、今見る、この海も、かもめの翅も、ねずみ色。／みな知つてるとおもつた、けれどもそれはうそでした。／空は青いと知つてます、雪は白いと知つてます。／みんな見てます、知つてます、けれどもそれももうそ知ら。 // (二―二三一)

といい、「不思議」では、

私は不思議でたまらない、黒い雲からふる雨が、銀にひかつてゐることが。／私は不思議でたまらない、青い桑の葉たべてゐる、蠶が白くなるのが。／私は不思議でたまらない。たれもいぢらぬ夕顔が、ひとりではらりと開くのが。／私は不思議でたまらない、誰にきいても笑つて、あたりまへだ、といふことが。 // (三―一六七)

と唄う。このように是非を超えた境地、法のままなる立場を理解したみすゞは「花のたましひ」において仏の花ぞの利他性を説く。

散つたお花のたましひは、み佛さまの花ぞのに、ひとつ残らずうまれるの。／だつて、お花はやさしくて、おてんとさまが呼ぶときに、ぱつとひらいて、ほほゑんで、蝶々にあまい蜜をやり、人にや匂ひをみなくれて、／風がおいでとよぶときに、やはりすなほについてゆき、なががらさへも、ままごとの 御飯になつてくれるから。

// (二―一〇九)

と。仏の心とは大慈悲であり、大慈悲とは利他の極みである。仏の花ぞの（浄土）は利他躍動の世界だから、散つた花のようにこの世で利他したものが生れることに不思議はない。親鸞は自然とは他力のはたらき（利他行）であつて人間のはからいをまじえないことだという。そして、本願自然の道理にかなうようになれば、おのずから仏のご恩もわかり、師の恩も知ることができるようになるという。みすゞははからいなく散つて逝つた花を見ながら、本願自然

の道理にかなう仏の花ぞの（浄土）を志向しているようである。しかし、みすゞもまた自我のはからいから離れられない自分の存在に泣いている。罪の自覚としての詩は一一五、一一二七、一一四一、一一五五、一一〇一、一一二五、二一一三八、三一二二一等である。「硝子」には、

思ひ出すのは雪の日に 落ちて碎けた窓硝子／あとで、あとでと思つて、ひろはなかつた窓がらす／びつこの犬をみるたびに もしやあの日の窓下を とほりやせぬかと思つては／忘れられない、雪の日の 雪にひかつた窓がらす//（二一一三三）

とある、この作品には繊細なみすゞのころ持ちと、罪業観が詠まれている。「犬」では

うちのだりあの咲いた日に 酒屋のクロは死にました。／おもてであそぶわたしらを、いつでも、おこるをばさ  
んが、おろおろ泣いて居りました。その日、學校でそのことを おもしろさうに、話してて、／ふっとさみしく  
なりました。//（二一一六二）

と唄っている。親鸞は「善悪の二つ総じてもて存知せざるなり」といい、善人とよばれる人も頼りなく、悪人とよばれる人もまた悲しい存在であると告白した。共に罪業深重の凡夫ということになる。「大漁」で

朝焼小焼だ 大漁だ 大羽鱈の 大漁だ。／濱は祭りの やうだけど 海のなかでは 何萬の 鱈のとむらひ  
するだらう。//（二一一〇一）

とあるのは絶対悪としてのみすゞの告白である。親鸞の告白「可<sup>シ</sup>レ<sup>ケツ</sup>恥<sup>イタム</sup>、可<sup>シ</sup>レ<sup>ケツ</sup>傷<sup>イタム</sup>矣<sup>（17）</sup>」は、またみすゞの懺悔でもあった。他力を説く浄土教に「自然」が大事となるのは、小さな人間のはからいがあるがままなる仏の働きを拒否するからであつて、その働きを拒否するものは凡夫の罪業である。みすゞには浄土真宗の内容である他力廻向、往生浄土、悪人

正機を生活の中で擬視した念仏者の詩がある。それは「お佛壇」である。

お背戸でもいだ橙も、町のみやげの花菓子も、佛さまのをあげなけりゃ、私たちにはとれないの。／だけど、やさしい佛さま、ぢきにみんなに下さるの。だから私はいいねいに、両手かさねていただくの。／家にお庭はないけれど、お佛壇にはいつだって、きれいな花が咲いてるの。それでうち中あかるいの。／そしてやさしい佛さま、それも私にくださるの。だけどこぼれた花びらを、踏んだりしてはいけないの。／朝と晩とにおばあさま、いつもお燈明あげるのよ。なかはずっかり黄金だから、御殿のやうに、かがやくの。／朝と晩とに忘れずに、私もお禮をあげるのよ。そしてそのとき思ふのよ、いちんち忘れてゐたことを。／忘れてゐても、佛さま、いつもみてゐてくださるの。だから、私はさういふの、「ありがと、ありがと、佛さま。」／黄金の御殿のやうだけど、これは、ちひさな御門なの。いつも私がいい子なら、いつか通ってゆけるのよ。／（二―二三三）

と。みすゞにおいて信心正因、称名報恩の真宗義は明らかに開顕されていると言ふことができよう。

## 註

- (1) 講座『日本思想』一自然（東大出版会、一九八三年）一四六頁。
- (2) 矢崎節夫『金子みすゞの生涯』（JULA出版局、一九九六年）一〇頁以下。
- (3) 矢崎節夫、先掲書一七九頁。
- (4) 大越和孝『金子みすゞの詩の授業化』（明治書院、一九九七年）
- (5) 「みすゞ通信」二〇〇二年八月（金子みすゞ顕彰会）
- (6) 高遠信次『詩論金子みすゞ』（東京図書出版、一九九九年）二四三頁。
- (7) 詩と詩論研究会『金子みすゞ永遠の母性』（勉誠出版、平成一三年八月）一七九頁。

- (8) 高遠信次、先掲書二一六頁。
- (9) 高遠信次、先掲書二一五頁。
- (10) 『文芸』別冊総特集金子みすゞ（河出書房新社、平成二二年）
- (11) 矢崎節夫、先掲書四七頁。
- (12) 矢崎節夫、先掲書八四頁。
- (14) 『歎異抄』総結の文（『真宗聖教全書』二卷七九二）
- (15) 『蓮如上人御一代聞書』一七一条（『真宗聖教全書』三卷五七二）
- (16) 『歎異抄』後序の文（『真宗聖教全書』二卷七九二）
- (17) 『教行信証』信卷（『真宗聖教全書』二卷八〇―一三）

